



JCPF会報

Japanese Cleft Palate Foundation
特定非営利活動法人 日本口唇口蓋裂協会

発行 特定非営利活動法人 日本口唇口蓋裂協会事務局
〒464-8651 名古屋市千種区末盛通2-11
愛知学院大学歯学部
TEL : 052(757)4312 FAX : 052(757)4465
振込口座：郵便局 00850-1-109941
三菱東京UFJ銀行覚王山支店 普通 1045666
<http://jcpf.agu.jp> E-mail : jcpf@jcpf.or.jp

Vol. 22, No. 1
(平成25年6月20日発行)

定価 400円

69



特別寄稿

参議院議員
参議院 厚生労働委員会 委員

石井 みどり

平素は日本口唇口蓋裂協会会員の皆さまに格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

先天的な口の病気である口唇口蓋裂をもつ国内外の子どもたちに対し、その健やかな成長を願い、皆さまが平素より真摯な活動を行っておられますことに、敬意を表しますとともに感謝申し上げます。

私は1976年から、小児歯科の臨床医として、多くの子どもたちの診療に携わってまいりました。私も、口唇口蓋裂のお子さんの治療を口腔外科医や形成外科医、そして矯正歯科専門医(自立支援医療機関)と連携しながら行ってまいりました。また、2004年からは日本歯科医師会常務理事として地域保健・産業保健の分野を担当し、2007年からは社会保障政策を軸足として国政全般にわたって参議院議員として活動してまいりました。

貴協会の活動については、ご家族の方々のための相談事業である「口唇口蓋裂ホットライン」や、ラオス・ベトナムなどの海外発展途上国での無料手術、そのための貴金属リサイクル活動について、心から共感し、いつか私もその活動の一助を担わせていただきたいと思っておりました。参議院議員として、国政の立場から口唇口蓋裂の諸課題に取り組んでまいります。

耳の軟骨を培養し製造した「インプラント型再生軟骨」により、口唇口蓋裂を治療する研究は広く知られていますが、山中伸弥教授のノーベル賞受賞により話題となった再生医療に関する法律「再生医療推進法」が、4月26日に成立いたしました。私は「再生医療を推進する議員の会」議員連盟事務局長としてこの法律の成立に取り組み、この度実現の運びとなりました。

今後も国政の場において、これらの研究の後押しを含め、口唇口蓋裂の子どもたちの明るい未来をつくるため尽力してまいります。結びにあたり、日本口唇口蓋裂協会会員とご家族の皆さまのご健勝・ご多幸を祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

ベトナム国ニンビン省医療援助隊に参加させていただいた

九州大学 小倉綾乃

かねてより何らかの形で国際医療に携わりたいとその方法を探していた私にとって、願ってもない機会を与えていただきました。

私が参加したニンビン医療援助隊は、約10日間、ベトナムのニンビン省にあるニンビン総合病院で、口唇裂・口蓋裂の患者さんに手術を行いました。私は、できる作業を手伝いながら手術を見学させてもらう毎日でした。初日、手術台の他には何もない部屋に自分たちで手術場を設営するところから仕事が始まりました。一通り設営が終わり手術室の扉を成したら、次は診察です。診察のために用意された部屋に行くと、そこには70人ほどの患者さんが待っていました。その多さに驚いたと同時に、この活動が現地の人たちにいかに理解され期待されているかを感じました。先生方の診察の結果、今回の行程の中では全30症例が治療の対象とされることになりました、翌日から手術が始まりました。1日5件というタイトなスケジュールだったので、その都度手の空いている人達で協力し合って、器具の洗浄から症例の写真撮影や子供の着替えの手伝いと、できることは何でもしました。

最初はゴミ集めやカルテの集計から始まった私の仕事も、見様見真似ができる仕事が日に日に増えていきました。仕事が与えられると、責任感と自信が生まれ、日々の活動の見え方が変化し、参加意欲がどんどん高くなりました。こういった場では、自分自身の能力を把握し、自分に出来ることと出来ないことを即座に判断して、出来ることに関しては自分から積極的に取り組むという姿勢が求められるのだと学びました。

当然ながら、現地での医療環境は、私が日本で見ていたものとは大きく異なるものでした。どうしても自分の周りにある環境を標準と考えてしまうので、現地では悪い方に驚くことの連続でした。しかし、その環境下で特段大きなトラブルもなく進んでいっている様子を見て、その地にはその地なりのやり方があり、現地で短期間の活動をする際には、相手の方法、考え方を尊重した上で、どの程度まで自分たちの主義を持ち込んでいいのかが大事なポイントとなることを知りました。現地の理解と協力を得られずしてこういった活動の成功はあり得ないと思います。将来的に現地の人たちだけで治療が行われるようになることを目的とした活動であれば、尚更、現地の事情を踏まえた上で進めていくことが求められると思います。

また、不思議なことに、最初のころは抵抗を感じていても、最後のころにはたいして何も感じなくなっているということも多くありました。例えば、診察をする際は、空いている部屋に使っていない木机と椅子をどこかから持ってきて置けば、それで診察室は完成です。最初こそ何か不安に感じましたが、特に不都合が生じる訳でもなく、患者さんも文句や苦情を言うこともありませんでした。そのうちに、椅子と机が揃っていれば、それだけで診察室に見えてくるようになりました。今振り返ってみると、このようなことがいくつもありました。自分の順応性に少し驚かされるとともに、郷に入ればある程度は郷に従えるものなのだと感じています。

自分の仕事がないときには、こっそりと手術室を抜け出して病室や待合室に子供たちや母親たちの様子を見に行っていました。この時間が私にとって一番楽しいものだった気がします。ニンビンでは、全く英語が通じないことがほとんどでした。ですから、もちろん一切の会話は成り立ちません。そのため、行って何を話すということもありませんでした。しかし、毎日気が付いたらそこに向かっており、長い間笑い合って過ごしていたように思います。この穏やかで楽しい時間は、この活動がニンビンの地で長い間かけて築き上げてきた信頼の証だと思っています。

ベトナムで見た、子供たちの生命力の強さ、母親たちの喜びに満ちた笑顔、そのすべてがこの活動の意味と意義を私に感じさせてくれたように思います。最終日、すべての手術が終わった後、病棟に診察に行かれる先生方に同行させていただきました。ほんの数日前まで口唇裂・口蓋裂で苦しみ、手術の後もぐったりとしていた子供たちが元気いっぱいになっている姿には、私の方が元気をもらえる程でした。このような現場に立ち会わせていただけたことに改めて感謝の気持ちでいっぱいです。母親たちが、私たちが最後に病棟を去るところまで、元気になつた子供を抱いて笑顔で見送りに来てくれた光景を、今後私は忘れるこはないだろうと思います。

今回の経験は、今後なるであろう歯科医師としての私の人生に、大きな影響を与えてくれたことは言うまでもありません。先生方の活動に臨まれる姿勢、考え方は、なかなか将来像が描けないでいた私に、私が今まで知らなかつた新たな世界を示してくれるとともに、より具体化した将来像と大きな目標を与えてくれました。

この活動での自分自身の行動を振り返ると、反省し改善すべき点がいくらでも浮かんできます。学生のうちに、こんなに素晴らしい、貴重な経験をさせていただいたことへの感謝の気持ちを忘れることなく、これらの反省から学び、学んだことを将来に活かしていこうと思っています。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えてくださった夏目先生をはじめ、いつも丁寧に説明し指導してくださった先生方、そして、私がこの活動に参加できるように関わって下さったすべての方々に、これを以て感謝の言葉とさせていただきます。

*平成25年2月28日～3月10日派遣

第67次ベトナム社会主义共和国医療援助事業活動 ニンビン隊 ボランティア参加者様より頂いたお手紙を掲載しています



総会・活動報告会開催

平成25年度特定非営利活動法人日本口唇口蓋裂協会 活動報告会が4月25日(木)に中部電力(株)東桜会館で開催されました。今回の報告会にはベトナム社会主義共和国ベンチエ省よりグエン・タン・ファン共産党中央書記長、グエン・トラン・ソーン投資計画局長が来名され、ご挨拶も兼ねてご出席くださいました。書記長らは、翌日、大村秀章愛知県知事、名古屋市、経済産業省中部経済産業局に表敬訪問され、河村たかし名古屋市長とも面談し、27日(土)に帰国されました。



川口理事長あいさつ



グエン・タン・ファン・ベンチエ省書記長

平成24年度 事業報告

国内事業

- (ア) 交流啓発事業
 - ・学生、ロータリークラブやキワニスクラブ関係者に協会の活動を紹介
 - ・五島みどり氏のチャリティコンサートを通じ活動を周知
- (イ) 口唇口蓋裂児-発生予防や治療法理解の為の事業
 - ・ホームページや講演会による情報提供
 - ・寄附講座での講演会
- (ウ) 親の会への援助
 - ・「11月11蓋を考える会」の親睦会で患者家族の抱える悩みなどにアドバイスを行う
- (エ) 憂みの相談事業
 - ・今年度は15件の相談があった。
医療・手術・治療に関する悩み 9件
病院紹介 3件
遺伝・結婚に関する悩み 1件
育児・授乳・離乳食に関する悩み 2件
- (オ) 会報発行事業
 - ・年4回発行し、活動の情報提供をした。
- (カ) 書籍、ビデオによる啓発事業
 - ・11月11蓋理解のため、本やDVDの提供を実施した。
- (キ) 言語障害者の遠隔言語訓練事業

- ・米国在住の患者家族へ言語発達指導、訓練を行った。

- (ク) 認定NPO法人としての事業

海外事業

- (ア) 医療診察事業
 - ① インドネシア共和国
 - 2 モンゴル国
 - 3 ラオス人民民主共和国
 - 4 ベトナム社会主義共和国
 - 5 ミャンマー連邦国
 - 6 エチオピア連邦民主共和国
専門家を派遣し、無償診療、無償手術棟を行った。
- (イ) 人材育成事業
 - ・モンゴル人4名、ベトナム人3名の受け入れ
- (ウ) 医療物資支援事業
 - ・モンゴル国へ手術室ならびに言語訓練センターを設置し、必要機材を贈与した。
 - ・ミャンマー、インドネシア等の各国に医療機材の援助を行った。
- (エ) 海外のNGOとの情報交流
 - ・第7回国際11月11蓋裂協会総会(CLEFT2012)が開催され、運営

に協力した。

- (オ) 自立支援事業

- ・ベトナム国への自立資金貸し付け

- (カ) 英文会報の発行

- (キ) 国際口唇口蓋裂協会事務局

- ・CLEFT2012に関する情報提供

- ・CLEFT2013の業務補助

環境保全事業

- (ア) 貴金属リサイクル事業

- (イ) 携帯電話リサイクル事業

- ・全国11の歯科医師会後援事業として、歯科医院や大学病院、一般の方々から預いた金歯、銀歯、撤去冠などの貴金属をリサイクルし、活動資金に利用

会員の増加のための事業

- ・HPの定期的更新、新聞、雑誌等への活動掲載により協会活動をPR
- ・コカコーラボトラーズ社と協賛し、「災害時の飲料水確保システム」募金機能付自動販売機の周知、設置
- ・ALSOKと協賛し、セキュリティシステム契約時の一括寄附を協力、案内を送付し、周知

平成25年度 事業計画

国内事業

- (ア) 交流啓発事業
- (イ) 口唇口蓋裂児-発生予防や治療法理解の為の事業
- (ウ) 親の会への援助事業
- (エ) 憂みの相談事業
- (オ) 会報発行事業
- (カ) 書籍・DVDによる啓発事業
- (キ) 言語障害者の遠隔言語訓練事業
- (ク) 認定NPO法人としての業務事業

海外事業

- (ア) 医療診察事業
 - ① ベトナム社会主義共和国
 - ② ラオス人民民主共和国
 - ③ インドネシア共和国
 - ④ ミャンマー連邦国
 - ⑤ モンゴル国
 - ⑥ バングラデシュ人民共和国
 - ⑦ チュニジア共和国
 - ⑧ エチオピア連邦民主共和国
 - ⑨ ケニア共和国
- (イ) 人材育成事業
- (ウ) 医療物資支援

- (エ) 海外のNGOとの情報交流

- (オ) 自立支援事業

- (カ) 口唇口蓋裂等の治療可能な胎児の命を守るための事業

- (キ) 英文会報の発行・HPへの掲載

- (ク) 国際口唇口蓋裂協会事務局

環境保全事業

- (ア) 貴金属リサイクル事業

- (イ) 携帯電話リサイクル事業

会員・収入の増加のための事業

平成24年度決算・平成25年度予算

科 目	平成24年決算額	平成25年予算額	科 目	平成24年決算額	平成25年予算額
I. 収入の部			II. 支出の部		
会費収入	8,265,895	8,250,000	事業費(1)人件費	5,668,125	4,530,000
財团等補助金	24,136,551	13,865,000	(2)その他経費	45,973,669	22,385,000
寄付金収入	38,499,255	24,100,000	管理費(1)人件費	13,300,986	11,550,000
雑 収 入	2,397,963	103,000	(2)その他経費	6,171,272	5,953,000
当 期 収 入 合 計	73,299,664	46,318,000	当 期 支 出 合 計 (B)	71,114,055	44,418,000
前 期 繰 越 正 味 財 産 額	24,918,476	27,104,085			
收 入 合 計 (A)	98,218,140	73,422,085	次 期 繰 越 収 支 差 額 (A)-(B)	27,104,085	29,004,085

最近の国内活動

■夏目長門常務理事 保健文化賞受賞

この度、第一生命保険株式会社が主催する第64回保健文化賞を夏目長門常務理事が受賞しました。医療分野では最も権威のある賞で、愛知県では15年ぶりの個人受賞となります。

平成24年11月21日に東京で受賞式が行われ、翌日には皇居にて天皇皇后両陛下に拝謁いたしました。

この受賞に際し、皆様からの多大なご助力に感謝を申し上げるべく、平成25年2月24日(日)に名古屋マリオットアソシアホテルにて受賞祝賀会を開催いたしました。祝賀会には、これまでに協会の医療援助で関わりの深いベトナムやモンゴル、ラオス、バングラデシュ、エチオピア、ケニアの在京大使をはじめ、大村秀章愛知県知事、政界からは古川元久衆議院議員、丹羽秀樹衆議院議員、鈴木政二参議院議員、大塚耕平参議院議員、財界からは白井文吾中日新聞社代表取締役会長、石黒大山東海テレビ代表取締役会長、病院関係からは船曳孝彦藤田保健衛生大学名誉教授、井形昭弘名古屋学芸大学学長、近藤東臣愛知県産婦人科医会会长、小出忠孝相談役、神野哲州愛知学院理事、河合幹愛知学院大学名誉教授、亀山洋一郎愛知学院大学名誉教授、田中貴信愛知学院大学歯学部長ら総勢232名の方々にご出席賜り、川口文夫理事長や大野榮人愛知学院大学学長からのご挨拶をはじめ多くのご祝辞を頂戴いたしました。

■ハノイ医科大学御一行 来名

平成25年3月24日(日)愛知学院大学との姉妹校提携継続の調印の為、ベトナム社会主義共和国、ハノイ医科大学のグエン・ドック・ヒン(Nguyen Duc Hinh)学長と、トロン・マン・ズン(Truong Manh Dung)同歯学部長、ハ・ファン・ハイ・アン(Ha Phan Hai An)同国際交流部長の3名がハノイから名古屋へ到着されました。日本口唇口蓋裂協会はハノイ医科大学御一行の滞在期間中、補助的業務を行いました。



■「かけはし信託愛の基金」よりご寄附をいただきました

三菱UFJ信託銀行が昭和52年に設立した「かけはし信託愛の基金」。この基金は、三菱UFJ信託銀行およびその関連会社の役員、従業員、退職者、家族から会費を募り、全国の社会福祉団体などへ寄付する活動を30年以上続けていますが、今回、日本口唇口蓋裂協会の活動が認められ、平成25年3月25日(月)に愛知学院大学楠元学舎にて寄附金の贈与式がありました。当協会としては2度のご寄附となり、小出忠孝相談役からもお礼と今後の活動に有意義に遣わせていただきますとの話をさせていただきました。



■駐日ラオス大使 講演会

平成25年4月16日(火)愛知学院大学日進学舎にてラオス人民民主共和国大使館のケントン・ヌアンタシン全権特命大使が学生を対象にラオス国における観光と投資について講演をされました。日本口唇口蓋裂協会の活動がきっかけで設立したラオスについて周知活動を進めるラオス研究所の引田弘道所長の発案で今回の講演会が実現され、少しでもラオス国が身近に感じてもらえばと、大使がスライドや観光パンフレットを用いラオスについて紹介をされました。



国際口唇口蓋裂学術会議(CLEFT2013)参加報告

2013年5月5日～10日の日程で、アメリカフロリダ州オーランドのHilton Orlando Lake Buena Vistaにおいて国際口唇口蓋裂学術会議(CLEFT2013)が行われました。この会議は4年に一度行われる国際会議で、参加者の出身国はヨーロッパ、アフリカ、アジア、ラテンアメリカ、北アメリカからと非常に多様です。会議の中のセッションの多くは、朝の7:00から始まり夕方の5:00まで行われていました。その中で、口唇口蓋裂治療の進歩、そして、今後の治療について様々な分野から報告がなされました。また、口唇口蓋裂の治療は、世界同一に情報共有し、基準を定めるという流れにあります。よって、大きな治療グループであるアメリカレフト(北アメリカ)、ユーロクレフト(ヨーロッパ)、スカンクレフト(スカンジナビア諸国)が活発にそれぞれの大陸・地域での治療方針・活動を報告していました。口唇口蓋裂の治療については、手技の多くは同様なのですが、治療方針、時期などは地域や国によって大きく異なっています。多くの治療報告の中で、日本口唇口蓋裂協会の活動の一つである、発展途上国における、口唇口蓋裂の治療、子ども達の環境についても報告がなされました。特にアフリカの国々における、口唇口蓋裂の子どもが治療を受けられないまま成長をし、社会生活を送っている現状が報告されました。この報告に対し、多くの意見交換がなされました。あるインドの形成外科医からは、「我々の国も同様であるが、子ども達が治療を受けられるようになるためには、やはり現地医師らが先進国の医師らから技術を学ぶ必要がある。そこから自分たちがどのように自立をし、口唇口蓋裂の子ども達の環境をよくしていくかを考えていかなくてはならない」との発言がありました。この意見に対し、アフリカ諸国の参加者はじめ、世界中の専門家から拍手が起きました。当協会は長年にわたり、技術移転を目的に海外医療援助を行っております。また、当協会が事務局をしている国際口唇口蓋裂協会も発展途上国の専門家からのサポートを目的に活動を続けています。こうした我々の活動が実を結び、世界中の口唇口蓋裂の子ども達が同様の治療を受けられる日が来ることを願っています。また同時に我々の活動の持つ意味、今後の目標を改めて確認する、非常に有意義な会議となりました。

「国際口唇口蓋裂協会 第8回国際会議」開催のご案内

口唇口蓋裂協会は国際口唇口蓋裂協会の事務局として、この国際会議の運営に携わっております。2010年韓国に次いで、アジアでの2回目の開催です。ベトナムのみならず、フィリピン、インドネシア、インドなど近隣諸国からの若い医療関係者の参加を呼び掛けております。アジア各国で医療援助活動に携わってこられた先生方、パラメディカルの方々、これから活動に参加しようとお考えの方方にふるってご参加いただけますようご案内申し上げます。

開催月日：2013年11月25日(木)～28日(木)

開催場所：ベトナム社会主義共和国 ハノイ・オペラハウス & ハノイ医科大学
大会URL：<http://icpf2013.vn/scientific.html>

抄録申し込みURL：<https://docs.google.com/spreadsheet/viewform?formkey=dDBTNjhUMFZmQk41SE1ibjZ6X21nZIE6MQ>

参加申し込みURL：https://amarlys-jtb.jp/hanoi_japanese/ (日本語でご登録可能です)

参考URL：https://amarlys-jtb.jp/hanoi_english/ (英語でのお申込み)

参加費用：

	2013年8月31日まで	2013年9月1日～11月8日	11月9日以降 および当日
医師・歯科医師	36,000円	40,000円	48,000円
看護師・研修医・大学院生	20,000円	24,000円	32,000円
学生	16,000円	20,000円	24,000円

同伴者(13歳以上)は登録時に係らず8,000円です。(当日のみUS\$100)

なお現地のホテル(会場との送迎バス付)と航空券、参加登録費をセットにしたパック旅行のご用意もございます。ご連絡いただければ資料を送付いたします。



資料請求先

国際口唇口蓋裂協会事務局

E-mail : office@icpfweb.org URL : <http://www.icpfweb.org/>

ご連絡いただいた方には、更新された会議案内を送付させていただきます。

海外医療援助

ミャンマー連邦共和国

平成24年8月7日～8月21日

(第41次ミャンマー連邦共和国医療事業活動)

平成24年8月7日から21日まで、大野紀和教授(愛知学院大学)、ボランティア歯科医7名を派遣し、Kalaw町の寺院内で、約487名の患者を診察し、60名の患者に抜歯、コンポジットレジン充填、根冠治療、スケーリング(除石)の歯科治療とブラッシング指導などを行った。日程は11日～13日までの3日間で、ミャンマーの若い歯科医師8名も参加した。愛知学院大学に留学経験のある、Khin Maung 先生や、当協会とも深い関係にあるヤンゴン歯科大学のKyu Kyu Swe Win先生も参加した。ミャンマーの先生達は主に抜歯で、日本人の先生は充填、抜髓を主に60人に治療しました。

Kalawでの活動後マンダレー観光をし、一足先に帰国する医師らを見送った後、大野教授はヤンゴン歯科大学で歯科治療、歯科教育について現地医師らと意見交換をした。

毎年訪問する日本人医師達は尊敬と感謝をもって迎えられ、参加するボランティア歯科医師はお盆休み返上での活動をライフワークとするかのように、5年、10年という継続した活動になってきています。協会がミャンマーへの医療支援をスタートして16年以上が経過し、その間に現地の医師らは世代交代し、次の世代の医師らへの技術移転支援が必要とされてきています。

【歯科医】

大野 紀和 愛知学院大学歯学部

【ボランティア参加歯科医】

(8月7日から15日)

小間 信一、小間 義朗、
戸田 喜之、山下 浩司、
山下佳代子、山田 真一、
山田 宏美

平成25年3月4日～3月15日

(第42次ミャンマー連邦共和国医療事業活動)

本事業は日本口唇口蓋裂協会と福岡歯科大学との共同事業として実施された。昨年11月に長年ミャンマー側受入窓口を引き受けてくださっているココマー前ヤンゴン歯科大学教授が来日の際、詳細が決定し、実施の運びとなった。

当協会からは2名が参加し、旅費・機材等、福岡・鹿児島地区のロータリークラブ、業者の協力を得て、助成金はなしでの事業となった。査証発給が遅れ先発隊の2名の出発にぎりぎり間に合うという網渡りであった。

手術は、マンダレー郊外にあるサガインのSitagu Ayudana Hospitalを主に実施した。この病院は僧侶病院とも呼ばれて、世界中からの寄附金で運営されており、近隣から多くの患者が来院し、ほとんど無料で治療が受けられることで有名である。当協会では、2008年12月に調査をしてから、4年ぶりに実現の運びとなった。手術は後発の福岡歯科大学チームの到着に先立ち、7日から協会チームとマンダレー歯科大チームがスタートさせ、8日からは福岡歯科大チームが合流し、4日間で合計28例の結果を得た。口唇口蓋裂以外にも「耳下腺腫瘍」の症例にも対応した。

Sitagu Ayudana Hospitalではドミニトリーに宿泊、制限も多かったが敷地内の清掃奉仕もするなど現地の関係者との交流の場としても有意義であった。今までの技術移転先である、マンダレー歯科大学、ヤンゴン歯科大学関係者とも交流し、次回の再会を約束してヤンゴンを後にした。

今回のミッションについて、計画から医療省、大学との連絡・段取り、ホテル、車の手配、など全てココマーフ前教授によるもので、あらためて感謝の意を表したい。また多くの関係機関からの機材の寄贈、寄附等について深謝します。

無料手術患者数合計：28

【口腔外科医】

川島 清美 鹿児島大学医学部
・歯学部付属病院
吉田 雅司 賽昭和会・今給黎
総合病院

以下福岡歯科大学・総合病院からの派遣者

【口腔外科医】

大関 悟、太田 信敬、
岡本 愛彦

【麻酔医】

野上堅太郎

【看護師】

因 美香 福岡歯科大学医科
歯科総合病院

インドネシア共和国

平成25年1月31日～2月10日

(第17次インドネシア共和国医療支援事業)

外務省平成24年度国際開発協力関係民間公益団体補助金を受け、スラウェシ島マカッサルでのCleft Center治療拠点設立のための事前調査を行った。スラウェシ島での活動は、当協会とインドネシア口唇口蓋裂協会(YPPCBL)で学んだ口腔外科医らが中心となり行っている活動で、特にDr.Ruslinは、Hasanudin University Dental School(ハサヌディン大学歯学部)の口腔外科講座の准教授であり、島内の口唇口蓋裂患者の実態調査や治療提供を幅広く行うために2年前にはSelebes Cleft Centerを設立するなど、精力的に活動を行ってきた。しかし、同大学歯学部附属病院には外来施設しかなく、入院設備や全身管理ができる手術室の設置に向けて、今後協議し、資金については日本外務省草の根の資金協力を目指すことになった。また、マカッサルとバンタエンにおける医療関係者への医療技術移転を行うとともに、口唇口蓋裂患者を中心とした計60名の手術治療を行った。

【口腔外科医】

野口 誠*	富山大学
大浦 健宏*	富山大学附属病院
藤原久美子*	愛知学院大学
辻 司	函館厚生院
	函館中央病院
砂川 奈穂	琉球大学
牧志 祥子	琉球大学

【麻酔医】

積永 清志* 富山大学附属病院

【看護師】

高橋 静香 富山大学附属病院

【その他ボランティア】

辻 香菜子 上智大学新聞学部
＊外務省平成24年度国際開発協力関
係民間公益団体補助金による参加者
**野口誠以外の帰国日 2月9日

ラオス人民民主共和国

平成24年12月20日～12月26日

(第20次ラオス人民民主共和国医療援助事業活動)

琉球大学医学部が中心となり13名の歯科口腔外科医がビエンチャンにあるセタティラート病院で45名の診療、うち19名の口唇口蓋裂患者に手術を行った。日本口唇口蓋裂協会は派遣の補助的業務をサポートした。

【口腔外科医】

砂川 元 琉球大学
 牧志 祥子 琉球大学
 砂川 奈穂 琉球大学
 伊藤準之助 琉球大学
 下地 柳盛 琉球大学
 鈴木 基明 琉球大学
 平田 淳司 琉球大学
 山本 芳輝 琉球大学
 梁 飛新 琉球大学
 他4名

ベトナム社会主義共和国

平成24年12月6日～12月9日
(第65次ベトナム国医療援助事業活動)

夏目長門常務理事が、愛知学院大学歯学部の田中貴信歯学部長、中村好徳准教授とともに訪越し、ドアン副国家主席との面談や在ベトナム日本大使館、ハノイ医科大学を訪問し、来年開催予定の日越国交樹立40周年記念事業について打合せをおこなった。

平成24年12月21日～12月30日
(第66次ベトナム国医療援助事業活動)

●ベンチエ隊(順不同・敬称略)

独立行政法人郵便貯金・簡易生命保険機構「国際ボランティア貯金に係る寄附金による援助事業」として、日本よりベトナム社会主義共和国ベンチエ省グエンディンチュー病院での口唇口蓋裂児の診察及び無料手術を目的とし、医療援助診療隊を派遣しました。診察日には、105名の子供たちが診察に訪れました。日曜日には、バスで1時間～2時間という病院から遠方で来院できない日本診療隊が手術を施行した患児の訪問診療を行い、現地の障害児学園を訪問し、たくさんの児童とふれあうことができました。手術日は12月24日～28日の5日間であり、1日12例、トータル60例の全身麻酔による口唇裂や口蓋裂の手術に加え、3例の局所麻酔下での手術を施行しました。今回のミッションには新たに歯科衛生士の参加もあり、術前の口腔ケアにも力を入れて行いました。口腔ケアにより、現地の子供たちの重度の齲蝕のため歯がほとんどないなど口腔内環境の悪さが浮き彫りになり、手術だけではなく少しでも齲蝕を減らしていくような試みが今後の課題の一つである。今回行った63例の手術は全て問題なく終了し、我々が帰国した後、手術を受けた方は全員問題なく退院したと連絡がありました。

今年で本ミッションは20年目という節目の年を迎えました。長年続けられているこのミッションが今回も無事安全に遂行できたことを報告します。

口唇口蓋裂協会参加者

(*はボランティア貯金助成金による参加者)

【口腔外科医】

吉増 秀實* 東京医科歯科大学
 井村 英人* 愛知学院大学
 大野 磨弥* 愛知学院大学
 阿部 史佳 大分大学
 上生 学 九州歯科大学
 吉田 将亜 旭川赤十字病院

【形成外科医】

嶋 謙一郎 社会医療法人敬和会
 大分岡病院

【麻酔医】

小北 直宏* 旭川医科大学
 小山 淑正* 大分大学
 福井 雅士* 医療法人春回会
 渡邊 誠之 井上病院
 木村 直暁 藤田保健衛生大学

【小児科医】

磯村 直子* 佐賀県立病院好生館

【看護師】

水野 敏子* 愛知学院大学歯学部附属病院
 丹下 尚美* 愛知学院大学歯学部附属病院
 菅野 香* 北海道大学病院
 大串 早月* 大分大学
 岩城 静香* 旭川医科大学
 藤澤 佳奈 社会医療法人敬和会
 立花香織理 大分岡病院
 九州歯科大学

【歯科衛生士】

池上由美子* がん・感染症センター都立駒込病院
 大鋸 優香 大分大学

【学生】

清田 貴茂 大分大学
 村上 亨 大分大学
 水上 友美 大分大学
 飛彈由紀乃 旭川医科大学
 鳥越 千翔 旭川医科大学
 早坂 太希 旭川医科大学
 福山 秀青 旭川医科大学

科学研究費による学術調査参加者:

香月 武 佐賀大学
 柳澤 繁孝 社会医療法人敬和会
 松田 光悦 大分岡病院
 富永 和宏 旭川医科大学
 河野 憲司 九州歯科大学
 夏目 長門 大分大学
 新美 照幸 愛知学院大学
 前田 初彦 愛知学院大学
 久保 勝俊 愛知学院大学
 吉田 和加 愛知学院大学
 加藤 世太 愛知学院大学



**海外医療援助隊2013への
ボランティアを募集しています。**

場 所:ベトナム社会主義共和国

ベンチエ省

日 程:2013年12月21日(土)

～12月30日(月)

費 用:25万円

募集締切日:2013年8月31日(土)

【お問合せ先】

日本口唇口蓋裂協会(担当:吉田)

info6@jcpf.or.jp

Tel: 052-757-4312 Fax: 052-757-4465

エチオピア連邦民主共和国

平成25年1月5日～1月23日

(第3次エチオピア連邦民主共和国医療援助事業活動)

平成25年1月5日(土)から1月23日(水)まで、特定非営利活動法人日本医学歯学情報機構と共同して、専門家6名をエチオピア連邦共和国ブタジラ地区Grarbet病院に派遣し、口唇口蓋裂患者20名の無償手術を実施して技術移転を行うとともに心電図モニターや医療機材などを寄贈しました。また、アディスアベバ大学歯学部で講演を行って現地の医師、歯科医師、学生、看護師と学術的交流を深めました。

エチオピアの口唇口蓋裂の発生頻度は1000人に1人程度と言われ日本より頻度は低いですが、医師が不足している上、経済的理由から適切な医療を受けることができず、さらにインフラの整備が不十分な地方では病院を受診することもできない状況です。本活動中も残念なことに来院することができなかつた多くの患者がいることを現地スタッフから聞かされ、この手術機会を失うと一生手術が受けられないと言われていました。このような事情のため、手術可能であった患者は現地スタッフの協力のもと夜遅くまで手術を行い、その手術患者の中には日本では通常生後3、4ヵ月で行う口唇形成術が30歳代で行われた患者も含まれていました。手術室には全身麻酔に最小限の機器や手術器材などは揃っていましたが、必要な器材や薬品の多くを日本から持ち込んだため飛行機の荷物重量制限をクリアするのに大変苦労しました。エチオピアの電気事情は年々よくなっているように思いますが、供給は安定せず、手術中に停电し、無影灯や吸引器が止まることもしばしばで、術者はヘッドライトが欠かせず、病室診察でもヘッドライトが必需品でした。海外医療活動は、現地の人々に技術を教え向上を図るとともに、医療環境整備に取り組むのも大切です。そのためには、多くの年数と継続的な支援、活動を担う人材育成が必要で、今後も、エチオピアで医療格差に苦しむ患者のために医療技術の移転や医療環境整備など継続的な医療活動を行いたいと考えています。

そしてエチオピアにおけるこれらの活動が評価され、新たにアワサ州にあるアワサ大学およびアワサ大学附属病院との医療交流を行うため、島根大学の先生方とともに各所を訪問し、調査・打ち合わせを行いました。

日本口唇口蓋裂協会派遣者：

【麻酔科医】

一杉 康^{*1} 日本大学

日本医学歯学情報機構派遣者：

【口腔外科医】

中村 典史^{*1} 鹿児島大学教授

西原 一秀^{*2} 鹿児島大学講師

渕上 貴央^{*1} 鹿児島大学

【麻酔科医】

高橋 直樹^{*1} 千葉県がんセンター

【通訳】

バーバリッチ サード 優子^{*3}

科学研究費等による学術調査参加者：

大谷 浩^{*1} 島根大学医学部長・教授

石橋 浩見^{*1} 島根大学医学部准教授

夏目 長門^{*1} 愛知学院大学教授

速水 佳世^{*1} 日本口唇口蓋裂協会

参加期間

*1 平成25年1月9日～1月20日

*2 平成25年1月9日～1月23日

*3 平成25年1月5日～1月20日

*4 平成25年1月6日～1月13日



在名古屋エチオピア連邦民主共和国名譽領事

エチオピア連邦民主共和国訪問

平成25年1月5日～1月20日

特定非営利活動法人日本口唇口蓋裂協会が特定非営利活動法人日本医学歯学情報機構と共同して行っているエチオピア連邦民主共和国での医療援助事業活動をきっかけに、日本で唯一の名譽領事館(事務局は日本口唇口蓋裂協会)が開設された(会報67号記事掲載)ことにより、このたび名譽領事の松本定道氏が、上記派遣隊と同時期に東美子夫人とともにエチオピアをご訪問されました。滞在期間中には、着任のご挨拶の為、在エチオピア日本大使館特命全権大使 岸野博之閣下ならびに外務省を表敬訪問しました。



モンゴル国

平成25年2月27日～3月3日

(第27次モンゴル国医療援助事業活動)

日本口唇口蓋裂協会の夏目長門常務理事は今年度9月に名古屋に開設を予定しているモンゴル国名譽領事館の名譽領事就任予定の医療法人生生会松蔭病院の理事長 安藤琢磨先生と共に平成25年2月27日～3月3日にモンゴル国を訪問し、関係者の方々、Sh.Sukhbaatar(外務省のConsul担当所長)、Ch.Bayarmunkh(Asia局長)、M.Sunberelzul(モンゴル国立健康科学大学の新学長)他と面談し、開設に向けての準備の報告、挨拶をさせて頂きました。



モンゴル国立健康科学大学



モンゴル科学アカデミー会長



モンゴル国立がんセンター

バングラデシュでの技術移転を振り返って

北海道大学大学院歯学研究科口腔健康科学講座 名誉教授 井上農夫男

私は、1995年7月初めてバングラデシュ人民共和国(バングラデシュ)を訪れた。この時期は雨期で大雨が続き、洪水でダッカ市郊外は川が溢れていた。

私がダッカを訪れた理由は、北海道大学大学院を修了した国立ダッカ大学歯学部(DDC: Dhaka Dental College)口腔外科のDr. Ahmedの要請であった。

Dr. Ahmedは“1億2000万人の人口に歯科医700人の現状を改善し、バングラデシュの歯科医療のレベルアップに貢献したい”という一念で、私の古巣である口腔外科第2講座河村正昭教授(現名誉教授)のもとへ一通の手紙を送った。彼は1987年1月22日、雪の中を河村先生の教室へやってきた。それから毎日々、バングラデシュの歯科医療や歯学教育の現状、さらに彼の将来の夢について、河村先生と話を重ねるうちに、先生は彼の夢を実現するには人材が不足していると考え、先生は人材育成のために関係各方面へ働きかけ、バングラデシュからの留学生を受け入れるように尽力した。大学当局の理解と支援を得て、口腔外科を始めとし、専門科別に毎年1名が、矯正科、補綴科、および口腔病理学講座の文部省留学生となり、バングラデシュの歯科の将来を担うべき人材育成が行われた。1992年、Dr. Ahmedは大学院を修了し、10か月の臨床研修を終えて帰国した。しかし、母国における人材育成には多くの困難を伴った。そこで、Dr. Ahmedは河村先生へバングラデシュの歯学教育と歯科医療の現状観察と、これらの改善に日本からの援助をお願いした。

1992年8月、河村先生は、ダッカ大学を訪問した。大学では、Hossain歯学部長(同立ダッカ大学歯学部1期生)から、1991年、国立ダッカ大学医学部から分離独立したばかりであるが、近代化計画を進めるために、日本の援助が要請された。DDCでは、保存、矯正、補綴、口腔外科の4名の教授が就任していたが、教育施設の老朽化がひどく、教官数も少なく教育環境は劣悪であり、診療面も十分に機能していなかった。当時、DDCの新しいキャンパスでは、OPEC財團の援助による歯科教育のための基礎教育・研究棟の建設の基礎工事が行われていた。これにリンクする歯科病院の建設には、外国のドナーによる経済的、技術的協力の支援がどうしても必要であった。このDDC改善計画に日本の政府開発援助(Official Development Assistance: ODA)、外務省・国際協力事業団(以下JICA)の支援を取り付けるべく河村先生は奔走し受け皿は整ったが、この計画は沢山の乳幼児が死亡するこの国の第1のプライオリティとはならなかった。

私はダッカ大学を訪れたあと、Dr. Ahmed要請に応えるには、如何にすべきかを思案していた。九州大学歯学部は国際協力事業団(JICA)の委託を受けアジア各地から歯科医師を受入れ歯学研修を行っていた。その一環として毎年20名前後の研修生が北海道大学歯学部付属病院を訪れていた。その引率者であった大石正道教授にバングラデシュへの医療技術援助のお話をしたところ、日本口唇口蓋裂協会夏目長門先生を紹介いただいた。そして夏目先生から宮崎医科大学歯科口腔外科芝良祐教授がバングラデシュへの医療援助を計画していることを伺った。そこで芝教授を隊長として三大学共同でチームを作り1997年からバングラデシュ医療援助がスタートした。私は残念ながらその年は文部省在外研究で不在のため、第1回医療援助には参加できなかった。その後1998年度から2003年度までこの医療援助へ参加した。このプロジェクトは2005年から次の段階へ進む計画であったが、国内外の情勢などから活動は途絶えた。

一方、2000年にはDr. AhmedはDDC口腔外科の教授に就任し、DDCの近代化に取り組んだ。政府により新しいダッカ大学歯学部付属病院が設立され、2011年2月には口腔外科の移転が終わり、口腔外科ベッド100床、一般外科・内科ベッド100床、総数200床の新病院がスタートすることになった。口腔外科のスタッフは約40名で、数人のスタッフがハエの飛ぶ手術場とベッド20床で診療を行っていた当時を振り返ると隔世の感がある。

1997年から2003年までの医療援助により口唇口蓋裂治療の初期段階の技術移転と人材育成が図られ、DDCにおいては教官が自ら手術を行えるまでにその技術は進歩した。しかし、口唇口蓋裂の治療は、単に裂隙を閉鎖することだけを目的としているわけではない。顎頚面形態の正常な発育と口腔機能の獲得を促し、成人となったとき、普通の人と同じような社会生活を営めることである。そのためには、今後、生まれてから成人になるまでの過程において、適切な時期に適切な処置が必要であることを教育し、それを担う人材を育成し、口唇口蓋裂の治療体制を確立していく必要があると考えている。

最後に、2009年12月24日に北海道大学歯学研究科とダッカ大学歯学部が責任部局となり、ダッカ大学・北海道大学間学術交流協定が締結された。これも、これまで日本口唇口蓋裂協会関係各位の皆様から頂いたご援助の賜であることを北海道大学歯学研究科ならびにダッカ大学歯学部の皆様に代わり心から御礼申し上げます。

※本記事はデンタルタイムス21に掲載されたものを、歯科時報新社様の許可を得て掲載しています

平成24年度 愛知学院大学寄附講座講演会寄附講座 — 口腔先天異常遺伝学・言語学講座 — 講演会のご報告

平成24年度 愛知学院大学寄附講座講演会寄附講座 口腔先天異常遺伝学・言語学講座が2月23日(土)に愛知学院大学にて行われました。今回の講師の先生は、静岡県立子どもも病院で多くの小児の言語臨床に当たられている、言語聴覚士の北野市子先生でした。「22q11.2欠失症候群の言語治療」をテーマにご講演下さいました。

22q11.2欠失症候群(Velo-Cardio-Facial Syndrome)は4000人に1人の頻度で出生するといわれています。この症候群では、口蓋裂、粘膜下口蓋裂、先天性鼻咽腔閉鎖機能不全が多くの方に認められます。

静岡県立子どもも病院は全身管理も行う総合病院ですので、形成外科、口腔外科のみならず、小児科、循環器科、耳鼻科など様々な診療科から本症候群のお子さんのご紹介がある、とのことでした。多くの患者さんに対する、先生の長期に亘る治療の中で得られた現場のお話、また経過フォローの重要性についてお話し下さいました。

今回の講演会には、言語聴覚学を専攻する学生、言語聴覚士、本症候群の親御さんなど参加頂きましたが、その中には石川県や東京からお越しの方もいらっしゃいました。参加された方々からは、「22q11.2欠失症候群がテーマの講演会は少ないので企画してくれて良かった」との嬉しい感想を頂きました。また特に、言語聴覚士の先生や親御さんからは、講演後に講師の北野先生へ活発に質問が出されました。

国内で出版されている本症候群に関する書籍は多くありません。親御さんや臨床現場で本症候群のお子さんの治療に当たっている言語聴覚士の先生方が疑問に思っていても、限られた情報源の中では答えが見つからないことがあったようです。参加下さった方々が、そうした疑問への答えを見つけて会場を後にして下さったのならば、企画者としては有り難い限りです。

愛知学院附属病院言語治療外来が事務局を務める、Velo-Cardio-Facial Syndrome教育協会は22q11.2欠失症候群のお子さん・ご家族をサポートするための団体です。今後も引き続き本症候群に関わる日本の方々へ情報発信をしていきたいと思います。

BOOKS

◆ちかちゃんのえがお

(関西地区口唇口蓋裂児と共に歩む会
[空会]発行 無料)

◆「口友会」からあなたへ

口唇・口蓋裂友の会編
(口唇・口蓋裂友の会発行 定価350円)

◆口唇口蓋裂児 哺乳の基礎知識

日本口唇口蓋裂協会編
(財団法人 口腔保健協会発行 定価320円税込)

◆口唇口蓋裂児 離乳食の基礎知識

日本口唇口蓋裂協会編
(財団法人 口腔保健協会発行 定価420円税込)

◆幼児期の口唇・口蓋裂の子供たち への理解のために

日本口唇口蓋裂協会編
(東山書房発行 定価150円税込)

BOOK & VIDEO をご希望の方は協会までご連絡下さい。(送料別)

◆学童期の口唇・口蓋裂の子供たち への理解のために

日本口唇口蓋裂協会編
(東山書房発行 定価150円税込)

◆口唇口蓋裂の理解のために

—すこやかな成長を願って— 第2版
河合 幹監修
(医歯薬出版発行 定価1,600円税別)

◆口唇口蓋裂の疫学的研究

河合 幹、夏目長門編集
(東山書房発行 定価2,500円税別)

◆まだ見ぬわが子のために

—親としてできるだけのことをしたい
という気持ちから—
河合 幹、夏目長門、吉田和加編
(定価1,500円税別)

◆チーちゃんのくち

渡辺真美作
(日本口唇口蓋裂協会監修 定価1,680円税込)

◆啓太君のお母さんの口唇口蓋裂手帳

稻葉なつる著 日本口唇口蓋裂協会編
(財団法人 口腔保健協会発行 定価420円税込)

◆心の扉

口唇・口蓋裂友の会編
(口唇・口蓋裂友の会発行 定価680円)

◆口唇・口蓋裂児者の幸せのために

口唇・口蓋裂友の会編
(ぶどう社発行 定価1,850円)

◆海外歯科ボランティアの道

香月 武著
(日本歯科新聞社 定価1,800円税別)

VIDEOS

◆口唇口蓋裂児 ことばの手帳

—初回手術を終えて—
(15分 1,500円)

◆口唇・口蓋裂児の育児手帳

(文部省選定)
(映像倉 10分 9,800円)

◆和子旅立ち

(文部省選定・日本歯科医師会推薦)
(映像倉 60分 38,000円)

◆ベトナムの子供たちに医療援助を

—笑顔を戻したい—
(30分 1,000円)

◆生まれ来るわが子とともに

—口唇口蓋裂と出生前診断—
DVD・ビデオ
(※会員向け貸し出しのみ)

[会報担当: 鈴木]



講演の様子



北野 市子 先生